

男性（50代）禁煙年齢・50代

「煙草は一生やめられない」と思っていた私が禁煙し一年六ヶ月経過したことを誰よりも私自身が一番驚いている。身長一メートル六十三、体重四十九キロ長いこと痩せすぎていることにコンプレックスを抱いていた私が十キロ太った。年中感じていた頭痛も消え、二十年来悩み続けた痔疾もほぼ完治した。

喫煙歴三十五年バリバリのヘビースモーカー、平均喫煙本数四十本、食事、入浴、就寝時以外煙草を離せないほどのニコチン依存『こんなに吸い続けては行く末は肺癌死一。やめなければ』と煙草を箱ごと握りつぶし何度も捨てた。口さみしさにパイポ、禁煙テープをかけながら禁煙ガムを噛んだり、禁煙飴をなめたり、二万円分もの禁煙パッチを貼ってみたりとありとあらゆる方法を何度も何度も試みるが我慢の限界は一週間ことごとく失敗に終わった。

そんな私に煙草と絶縁出来る日が来ようなど夢想だにしなかった。

一昨年九月末頃から妻は「疲れる、疲れる」と繰り返し言っていた。『煩いな一俺だって疲れているのに』と内心うんざりした。「そんなに疲れるなら少し休めよ。疲れるって皆疲れているよ」との言葉しか出来なかった。

数日後「私、病院に行ってみる」と掛かり付けの内科医院に行った。問診、血圧測定、血液検査を受けたが、異常なしの結果に納得いかない様子の妻を、私は更年期なのだろうと思った。

その後も「疲れる」の言葉は妻の口についていた。十一月に入り「右肩と背骨が痛むし、横向きになると苦しくて寝られないから」と再び内科医を訪ねた。今度はX線と心電図検査を受けたところ先生から「どっちの検査結果もきれいだけれど一寸この影が気になるから、念の為明日CTを撮りましょう。念のためだから」と言われたと妻は不安気だった。私は『念のためと言うことだし、太って健康そのもの食欲もあるし、肺癌なんてはずはない』と高を括っていた。ところが次の日、CT検査を終えた妻から仕事中の私に電話が入った「肺に腫瘍のような物が出来ている……」平静を装い淡々と話す妻の声が遠くに聞こえた。『まさか……』

妻の父が肺腫瘍を患い、亡くなって十ヶ月。妻までも……。疲れたと病院に足が向いてしまうほど、よく働く妻……あれやこれや胸中を過った。仕事を急

いで熱し帰宅したその夜、お世話になった内科医から電話が入った「肺腫瘍かもしれない。取りあえず紹介状を用意しますので大学病院で検査を受けて下さい」血の気が引き動揺を隠せぬ私に「病気の主は私……。私のお葬式には……」覚悟が出来てしまったように自分の事より私の心配ばかりする妻を泣きながら精一杯抱きしめていた。妻と二人地獄に吸い込まれそうな眠れぬ夜は紹介状を携え大学病院に行く日まで数日間続いた。毎日毎日、良性腫瘍であることだけを祈った。

大学病院の呼吸器内科で診察を受けた「末梢型の肺腫瘍です。診たところ悪性ではないようですが、100%大丈夫とは言いきれないので気管支鏡検査か摘出検査を受けて頂くようになります。腫瘍の場所が肺の奥の奥なので内科医の私が言うのは何ですが、摘出検査を勧めます。まずその前に予約を取りますので一応ペット CT も受けて下さい。結果は……」との教授の診断に私は少し気が楽になった。妻も帰りがけデパートに寄りたいたいと言う程いつもの明るさを取り戻した。

少し安心を得た妻は今度は私に検診を受けることを強いた。私は素直に従い泊ドッグを受けた。十日近くして検査結果が届いた。開封して青ざめた。肺の腫瘍マーカーの値が正常値を越えているので再検査を受けるように、とある。『二人揃って肺腫瘍……そんな事』色々な思いが交錯した。娘のこと、仕事のこと諸々……。『何で煙草なんて吸い続けていたのだろう』後悔と自責の念にかられ自分を罵倒した。そして金輪際、煙草は吸わないと固く決意した。ヘビースモーカー返上の日である。

またしても、妻との眠れぬ地獄の夜を迎えていた。まずは大学病院で妻と同じ医師の診断を仰ぐことを決めた。前回妻の付き添いだった私が、妻に付き添われ教授の診察を受けた「あまりきれいな肺ではありませんが心配の必要はありません」胸をなでおろした私達。その三ヶ月後、妻も胸部外科で胸腔鏡による摘出手術を受けた結果は100%良性腫瘍との診断であった。地獄から一転天に昇るほどの喜びであった。あれからまだ見ぬ孫が結婚する日まで二人仲よく元気であることを目標に、私五十六才、妻五十三才肩よせ頑張っている。

あれほど好きだった煙草だが、爪の垢ほどの未練もない。